

ワカサギ、シラウオの調査

(宍道湖・中海水産資源維持再生事業)

松本洋典・三浦常廣

1. 研究目的

宍道湖・中海におけるワカサギ、シラウオの資源・生態と、それを対象とする漁業の実態を明らかにし、これら資源の維持・増大を図る。

2. 研究方法

(1) ワカサギ産卵状況調査

平成20年2月に斐伊川河口から約2km上流の灘橋までの間に設けた計24箇所調査船わかさぎ丸(0.8トン)を用い、エクマンバージ採泥器(0.02m²)で採泥した。試料は10%ホルマリンで固定し、実験室でローズベンガルで染色を行い、付着器が膜状のものをワカサギ卵とした。

(2) 稚魚分布調査

平成19年6月に宍道湖および新建川・船川の計18箇所調査船わかさぎ丸を用い、桁引網(目合2mm、全長26m、桁長4.5m)により各箇所30m曳網した。

(3) ワカサギの溜池移植放流後追跡調査

平成13年5月に宍道湖周辺に位置する農業用溜池(約110m×約25m×深さ約6m)に1,500尾(宍道湖産ワカサギ人工種苗、平均全長30mm)を移植放流後、毎年12月に数kg~数十kgのワカサギの漁獲があり、実態を調べた。

3. 研究結果

(1) 産卵の状況(巻末の資料参照)

採泥箇所数24箇所のうち、ワカサギ卵が採集されたのは13箇所であった。また、卵の採集個数も1m²当たりワカサギ平均173個で、昨年の56個から約3倍に増えたものの、依然として低位の水準にある(参考:14~17年度平均2,005個)。

(2) 稚魚の分布状況(巻末の資料参照)

今年度の1曳網当たりのワカサギ稚魚平均入網尾数は0.72尾(14~17年度144~279尾)で、

昨年の3尾からさらに減少した。一方、シラウオは1,095尾(同933~2,183尾)と、平年並みの結果であった。

(3) ワカサギの溜池移植放流後の漁獲実態

移植放流後は無給餌で再生産が行われており、今回は11月20日に約26,000尾(23kg)のワカサギが取上げられ、親魚用に4,000尾程度(目視)が残された。魚体は満1歳魚が大半を占めていたが、漁獲魚の一部を持ち帰って鱗を使った年齢査定を実施したところ、満3歳の個体も観察された。

(4) 今年度の漁獲

今年度の定置網漁獲記録(宍道湖漁協集計)では、ワカサギの漁獲は0(採卵用の親魚漁獲を入れても1kg未満)であり、平成19年2月の産卵量調査結果、および今年度6月の稚魚分布調査結果における過去最低の水準を大きく反映している。また、採卵用に集められた親魚100尾を、採卵後に宍道湖漁協から譲り受け、鱗を使って年齢査定を実施したところ、大半を2歳魚が占めていた。さらに3歳魚がこれに次ぐが、当歳魚は全く観察されず、現在の宍道湖におけるワカサギの資源構造が危機的な状況であることが示唆された。

一方シラウオは約900kgの漁獲があり、平年並みの水準であった。

4. 研究成果

- 得られた結果は、宍道湖漁協のます網組合の役員会および総会で発表した。
- さらに宍道湖・中海水産資源維持再生事業検討会でも発表した。
- 資源の危機的状況に対応するため、産卵期における漁獲制限の強化と、ため池を使った採卵用親魚の安定確保を漁協に提案したところ、いずれも漁協が主体となって取り

組まれることになった。

- このうち新たな漁獲制限措置は平成20年1月15日から直ちに実施され、これまでの斐伊川河口域に限定された刺し網の禁漁から宍道湖全域に強化された（1ヶ月間）。
- また、親魚確保のためのため池利用についても、平成20年3月5日に新たな農業用ため池に宍道湖由来の発眼卵およそ1万粒を放流し、今後の推移を見守ることとなった。